

神戸アニマルケア国際会議 2009

日時：2009年12月12日（土）9:00～12:00

場所：神戸国際会議場メインホール

開 会 式



○富永佳与子

御来場の皆様にお知らせ申し上げます。間もなく開演時間の9時となりますが、まだお見えになっていない方もいらっしゃるということで、開演の方を10分か15分ほど延ばさせていただきます。お忙しいところをおいでいただきましたところ、大変申しわけありませんが、御了承の方をよろしくお願いいたします。

間もなく開演5分前です。お席にお戻りくださいますよう、よろしくお願いいたします。

本日は同時通訳となっております。レシーバーをお使いくださいませ。日本語はチャンネル1、英語はチャンネル2となっておりますので、よろしくお願いいたします。

皆様、おはようございます。本日は御来場を賜りまして、本当にありがとうございます。本日、司会を務めさせていただきますNPO法人Knots理事長の富永でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本会議は、大震災動物救護メモリアル協議会、構成団体、兵庫県、神戸市、社団法人兵庫県獣医師会、社団法人神戸市獣医師会、社団法人日本動物福祉協会阪神支部及び神戸市動物愛護協会の御共催のもと、開催させていただきます。

神戸は阪神・淡路大震災から来月で15周年を迎えます。御存じのとおり、あの震災で初めての組織的な動物救護が行われました。私たちは、そこで何をすることと

なり、また、この会議へとつながる思いを持ったのか。まず最初にお時間をいただきまして、阪神・淡路大震災動物救護事業を振り返ってみたいと思います。

（ビデオ放映）

ありがとうございます。あの5匹のキャラクターたちは、この会議のキーワードをあらわしております。皆さん、今後とも、どうぞ彼らをよろしくお願ひしたいと思います。

基調講演に先立ちまして、あの震災で失われたたくさんの命のために、黙祷の御協力を願ひたいと思います。

また、皆様も新聞報道などで御存じかとは思いますが、島根県立大学の学生の平岡都さんは、この会議に御登録をされておられました。平岡さんへの黙祷もあわせて、よろしくお願いいたします。御協力を願ひします。黙祷。

（黙祷）

皆様、御協力ありがとうございました。

皆様の、本日お手元にもございますかと思いますが、島根県警の方では、引き続きまして事件につきましての情報を集めておられます。何かございましたら、皆様のお手元にお配りしておりますカードにもありますように、0855-22-0110、0855-22-0110、島根県警・広島県警・浜田警察署内合同本部まで、よろしくお願いいたします。皆様の御協力を重ねて願ひ申し上げます。

それでは、早速、基調講演の方に入らせていただきます。大震災動物救護メモリアル協議会会長の市田成勝先生より、当時の動物救護を振り返り、御報告を賜ります。

市田先生の御経歴につきましては、詳録の方を御参照いただきたいと思います。

それでは、阪神・淡路大震災における動物救護について、市田先生、よろしくお願いいたします。

アドバイザーメッセージ

日時：2009年12月12日（土）9:00～12:00

場所：神戸国際会議場メインホール

○富永佳与子

市田先生、どうもありがとうございました。動物救護の報告をいただきまして、また思いを新たにされた方もたくさんいらっしゃるのではないかと思います。

それでは引き続きまして、本会議設立当初より私たちを支えてくださっておりますアドバイザーの皆様を御紹介したいと思います。

アドバイザーの皆様、御登壇をお願いいたします。

この会議、大変専門性の高いものでありますので、精神的にも、実際の学際的な部分におきましても、アドバイザーの皆様のアドバイスのもとに構成をさせていただいております。今回は、このアドバイザーの皆様が、この会議に向けてどのような思いを持って取り組んでくださり、また、今後に向けてどのような抱負を持っていらっしゃるかということ改めて皆様にお話ししたいと思っております。皆様、大変よく御存じの先生ばかりと思っておりますが、意外と御自身の御意見というのをこういう場で発表なさるといことは、余り機会があられないのではないかと思いますので、大変貴重な機会だと思います。

まずは、御紹介の方をさせていただきたいと思っております。

四条畷学園大学教授、植村 興先生です。

続きまして、公益社団法人日本動物病院福祉協会顧問、赤坂動物病院院長、柴内裕子先生です。

社団法人和歌山県獣医師会会長、玉井公宏先生です。

社団法人日本動物病院福祉協会獣医師調査員、山口千津子先生です。

そして、最後になりますが、皆様よく御存じの、ペット研究会「互」主宰の山崎恵子先生です。

それでは、早速アドバイザーの皆様より、この会議のあり方及び今後に向けての抱負を、お一人お一人語っていただきたいと思います。

まずは、植村先生から、よろしくお願いたします。



アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

植村 興 Takashi UEMURA

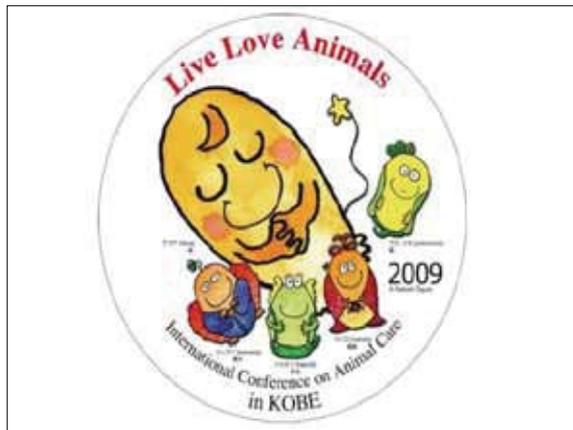
四條畷学園大学教授

Professor, Shijonawate Gakuen University



皆さん、おはようございます。ただいま富永理事長から御紹介いただきました植村でございます。

皆さま、お手元のプロシーディングスをご覧ください。そこに、かわいいマスコットが2匹、いや2つかな、おりますね。【スライド1】



【スライド1】



神 God アクア

一番大きな、ゆったりしと居眠りしているのがアクアちゃん。これはハワイの現地語で、日本語では「神」。



扉 Door
プカ・コモ

アクアちゃんの右にいるのがプカ・コモちゃん。プカ・コモとは「Door, 扉一戸」という意味だそうです。アクアとプカ・コモのコンビで、「神の戸」、「神戸」なんですね。それで、これらマスコットの代表としてアクアちゃんとプカ・コモちゃんがいるわけです。

これらの可愛いマスコットたちは Knots さんの大変なの苦しみを経て産み出されたものです。

■富永理事長、正門の扉を開ける

先ほど、富永理事長は、ご挨拶で Knots 城の正門を開けられ、アクア様を紹介されました。Knots の活動は、人と動物の「きずな」を強めようと立ち上がった Knots の侍たちが阪神淡路大震災を機に、人が動物に対する責任を果たさなければならない、

人と動物の絆を一層深めなければならない、ということに気づかされて、活動を深められたという、そういうお話でした。富永理事長が Knots 城の正門の扉を開けられたわけです。

■市田会長、玄関のドアを開ける

その次に、市田先生からは、阪神淡路大震災の動物救助活動の経過を詳細に紹介していただきました。多くの人が献身的に動物を救済することを通じて Knots さんの最終目標である「人と動物の絆」が如何に高められたかを詳しく紹介していただきました。私は、市田先生により、Knots さんの玄関のドアを開けていただいたものと理解しております。

そうしますと、次は私の役割なんですが、私は、仕事をのぞいてみたいと思います。

■植村、仕事場のドアを開ける

Knots さんの今シンポジウムの活動は、Knots の侍たちだけではなく、会場にご参加いただいている皆さま方を含めて、あえて、我々と呼ばせていただきますが、・・・、私は、我々の仕事場のドアを開けて、仕事の内容確認をさせていただきます。それが私の役割です。我々の仕事は、目標達成のために今までも努力してきましたし、今回から、さらに将来へ向けて引き続いて活動していかなければなりません。理想の「人と動物の絆」を深める目標に終着点はありません。明日は今日よりも良くなければならないからです。

プロシーディングスにメッセージを書くときに、偶然なんですが、オバマ大統領さんのポー君の話が大変な話題になっていました。オバマさんは大統領就任演説で、お嬢さんに選挙が終わったら、ねだられていた犬を飼ってあげましようと言われました。

感動的なお話でしたが、そんなに単純な事ではないんですね。ホワイトハウスの大統領の犬はファーストドッグと言うんですが、ファーストレディー同様、世界中の人が注目している。しかも、ファーストドッグは重要な役割を担っている。これは、私ども動物と日ごろ接触していますので十分に理解できるのですが、愛犬は精神的に落ち着かせてくれる。大統領は本当に困難な仕事、大変な決断を下さなければならない、精神的にも極度に張り詰めておられる。我々も大統領の挙動を緊張して見守っている。

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

こういう緊張状態の中で、大統領がヘリコプターから降りてこられた時、ファーストドッグが足元に近寄ってきて、ほおずりしている、こういう映像が流れますと、我々もほっとします。

緊張して、大統領、何を言われるのかなと・・・、その緊張感が、それこそ、1頭の犬によって全てがほぐされる、まさに大統領に匹敵する仕事をファーストドッグが演じているわけです。

ところで、あの決断の速いオバマ大統領が、犬を選ぶのに3カ月もかかったんです。だから、大統領就任は1月でしたが、ファーストドッグのお披露目は4月10日過ぎでした。その選考経過がインターネットとか、新聞とかで報じられている。それを見ていると、私たちが動物と共生する際のすべての問題が浮き彫りにされているんですね。

まず、最初に問題になったのは、子供のおねだりに対して、子供さんに動物を飼う責任をどうとらせるかという取り決めをせんとアカンということ。

次に、娘さんがアレルギー体質で、犬種の選定にあたっては、アレルギーを引き起こさないような犬種を選ばなければならなかった。こういう課題もあったんですね。

さらに、オバマ大統領はシェルターのワンちゃんを何とか選びたかったそうですが、何か、政治的とかがあって、結局、上院議員のエドワード・ケネディーさんのワンちゃんを譲り受けることになりました。こんな我々の世界とは違う、色いろな事情もあるのでしょう。

以上のように、大統領にして、ファーストドッグの選考に3カ月もかかった。この中に、私たちが抱えている多くの問題が含まれている、こういうふうに感じました。

時の経過は矢のごとし、です。一昨日になりますか、オバマ大統領はノーベル平和賞をもらえることになりました。こんなん、だれも予想していなかったんですが、原子爆弾を地球からなくしましょうという決意を表明された。それが受賞理由です。それがノーベル平和賞に相当する。

また、エドワード・ケネディー上院議員には、このオバマ大統領のノーベル賞を見ることなく、知ることなく、お亡くなりになりました。意地と言っては、語弊があるかもしれませんが、ケネディー上院議員の大役を引き継いだボー君が、ファーストドッグとして、これから大事な仕事を続けてくれる。これも、何か、歴史とか、運命とかは分からないものだな、と考えさせられました。

それから、オバマ大統領は、一昨日のノーベル賞受賞

記念講演を通じて、私たちに強烈なメッセージを与えてくれました。それは、「平和のために戦争は許される」ということ。

今、私たちは、動物たちと理想の共生社会をつくるためには、動物の「命」に対してどう対峙しなければならないかという困難な立場に立たされています。不要な動物、マイナスの動物は無条件で駆除していいのかどうか。自然界の野生動物、自由に活動している動物のすべての「命」を「愛」のもとに護らなければならないのかどうか。野生動物をそのまま放置しておく、増え過ぎが原因で絶滅に至る事が分かる場合もあります。農場を荒らしたり、社会に病気を持ち込んだり、直接の危害を加えて我々を困らせることもよく起こります。その結果、「動物のため、人のために動物の命を奪うことは許される」ということ。

Knotsさんの活動は、我々人間は動物の愛とか、動物がかわいいとか、動物に癒されるとかで動物から利益を一方的に受けていたけれども、このままでいいのか、もっと動物の愛や命を守る立場に立って行動する必要があるのではないか、もっと責任を自覚して動物を飼育し利用する必要があるのではないか、という困難な活動を続けられています。

オバマ大統領は、許される戦争があると断言された。私たちは、動物とのよりよい共生のために、いやなことだけれど、動物の命を奪う場合もあります。私たちは、実に重たい課題を背負っています。この問題についても、本シンポジウムで率直な意見の交換をしてみたいと思います。

Knotsさんが先導する私たちの活動は容易ではありません。資金援助も簡単には得られません。学校飼育動物活動も停滞しています。こんな場合は、粘り強く、継続して学習を深め、活動の場を広げるしかありません。根競べです。今回は9回目のコンファレンスですが、ここまで、へこたれることなく活動を続けられてこられたKnotsさんに敬意を表します。

以上、私は、私たちの仕事場の扉を開けて、皆さま方に仕事の中身を紹介させていただきました。「人と動物の絆」を深めるといふ、終わりなき目標へ向けて、会場の皆さま方とともに、本コンファレンスも今後、10回、20回と開催し、私たちの活動を継続していくことを決意して、私のメッセージとさせていただきます。継続こそ力なり。どうもありがとうございました。

○富永佳与子

植村先生、どうもありがとうございました。何だか、ほめていただいて、ありがとうございます。

私どもKnotsという団体の名前は、実は結び目という意味です。皆さんをおつなぎして何かをしていこう、皆さんの力を合わせたら、多分一人一人でやるよりは、もっといろんなことができるんじゃないか、そんな思いでやっております。

私どものテーマは人と動物の共生ということです。先ほど、愛というようなこともありましたけれども、やはり何が問題で、何が大切で、それを解決するためにどうしたらいいのかという冷静な気持ちというのを常に持ち続けるということが、先ほど言っていたきました我々の仕事につながるのではないかと思います。

私どもは、やはり場をつくるのが仕事だと考えております。私たちが頑張る場をつくれますので、皆様、それを御活用いただきまして、さらに仕事場の扉の奥へと進んでいただけたらと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは引き続きまして、柴内裕子先生の方をお願いしたいと思います。柴内先生、よろしくお願いいたします。

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

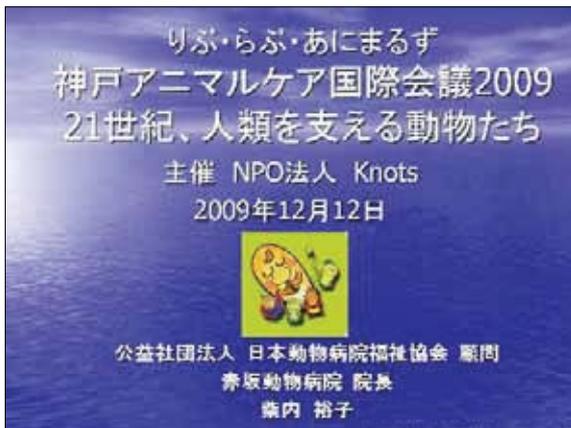
柴内 裕子 Hiroko SHIBANAI

公益社団法人 日本動物病院福祉協会 顧問 Advisor, Japanese Animal Hospital Association (JAHA)
赤坂動物病院 院長 Director, Akasaka Animal Hospital



皆さん、おはようございます。
きょうは市田先生のお話、そして、今の植村先生のお話、本当に私も感銘深く伺いました。

そして、最初に、この大会を開催されて、きょうまで持ってこられましたKnotsさんの皆さんに、心から御礼



【スライド1】

を申し上げます。Knotsさんにはこれから先長くと、今、植村先生もおっしゃってくださいました、ますますお忙しくなるとは思いますけれども、ぜひ、富永さんを中心にこれからもご活躍下さい。

まず、そのお礼を申し上げました上で、植村先生が神の扉を、玄関もあけてくださいましたから、私たちは玄関の中から、これから順番に出てきて、それぞれのパートをお話し申し上げたり、皆様と御一緒に考えていただく場面であると、このように思います。ありがとうございます。

私は、植村先生と同じように、このメッセージの中に書いておりますけれども、第二次世界大戦を体験している、この会場で最も古い人間かもしれません。そして、そうした経験の中から、今、地球上で、戦争など、人が人を殺すようなことは決してあってはならない。これほど悲惨なものはありません。そうでなくても、この阪神・淡路の大震災のような、地球のエネルギーが吹き出すような、恐ろしい自然からの猛威もあるのです。そうした自然の変化に対して、本当に私たちは抗していかななくてはならない。その中で、地球上で人が人を殺すなど。

先ほど、戦争は平和のために必要かもしれないと伺いました。戦争で平和を願っていくなどは決して願っては

なりません。これほど悲惨なものはないのです。戦争は人が起こす最悪の犯罪です。決して戦争を起こさないためには正しい教育しかありません。人間が持っている遺伝的素因、そして、生まれてから10歳までの大切な脳の発達の時期の環境と教育、それも家庭の教育、社会、学校での教育は、人間が人間になるための最も大切な基礎になると思います。

しかし、今、さまざまな理由から、正しい教育をごく自然に受けられるはずだった人類が受けられなくなってきている事実です。そのことの一助に、身近にいる伴侶動物、そして、様々な動物や自然が人間に大きく感作していることに気づきます。

今回、こうした動物とのかかわり、そして、自然とのかかわりに焦点を当てて、各分野からの発表が、きょう、あす、あるわけですが、私がこの会議に願っていることは、この会議を安全な地球を支えるために、生かしてほしいことです。この会議は、さまざまな場面で息づく動物たちの命をテーマにして、それぞれの分野の専門の方々の協力のもと、家庭の、社会の、地球の将来に気づき合い、つなぐ会議であるよう願っています。

1995年、だれも予想もし得なかった阪神・淡路の大震災が起こりました。大惨事の中で、人の命とともに、動物たちの命についても真剣に取り組まれた機会でもありました。日本では、この阪神・淡路大震災がボランティア元年とまで呼ばれました。

今日は、この会場にも人と動物のふれあい活動で活躍するJAHA CAPPセラピー犬がキャリアに入ったままならば足元に置いてよいと会場側のお許しをいただいておりますので、よろしく願いいたします。

進めさせていただきます。

今から24年前に、現在、公益社団法人になりました日本動物病院福祉協会の責任者として、海外では既に実践されていた人と動物の触れ合い活動を日本で最初に訪問活動としてスタートさせた責任者です。それから24年、大きく日本の社会が変わりました。

いつも山崎恵子先生が、太古の血の話をされますが、私もそのとおりだと思います。人類は大自然の中で、哺乳類として最も後発の生物ですが、その新参者の人類が、今、地球上を思いのままにしています。このことは重大な責任です。人類は厳しい自然に会い、また温かい自然

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

に包まれ触れながら成長してきました。

このように、せっかく人類として多くの感性を持ち続けてきたにもかかわらず、今、自然に触れる機会が、少なくなり、動物と暮らし、接する機会も遠のいたことが、人類としての、この正しい感性を育てることさえ難しくなっています。都市化が進み続けることによって、人類が間違った方向に進めば、地球は大きな危険にさらされてしまいます。



【スライド 2】

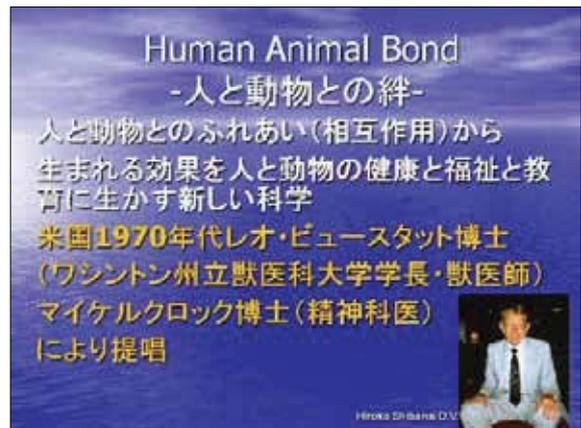


【スライド 3】

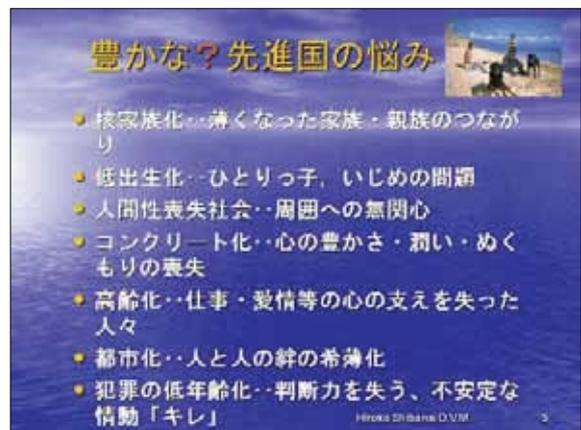
さて近年、人と動物（自然）との関わりを相互作用と称し、相互作用から生まれる効果をヒューマン・アニマル・ボンドという大切な言葉で表現しています。人と動物との絆です。これは世界共通の理念でボンドは、結びつける接着剤のボンドの意味です。しかし、日本には絆という素晴らしい言葉があります。こうした人と動物の絆を大切にすること、人と動物双方の福祉、健康、教育に生かすことが目的です。【スライド 3】

このヒューマン・アニマル・ボンド、この理念は人と自然の関わりを科学的に効果的に活用することです。

このヒューマン・アニマル・ボンドという言葉をも提唱したのは、この画面にいらっしゃるワシントン州立獣医科大学の学長をされた獣医師のレオ・ビュースタット先生と精神科医のマイケル・クロック博士です。【スライド 4】

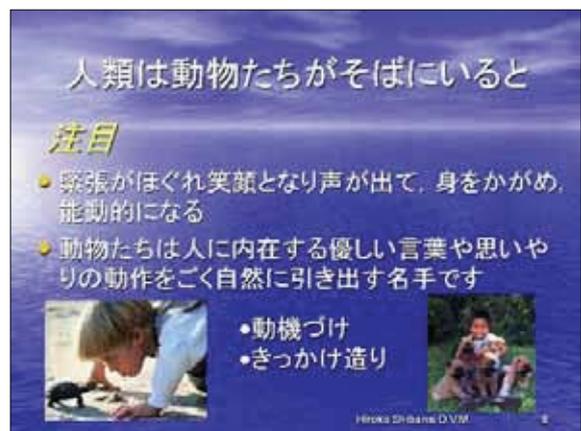


【スライド 4】

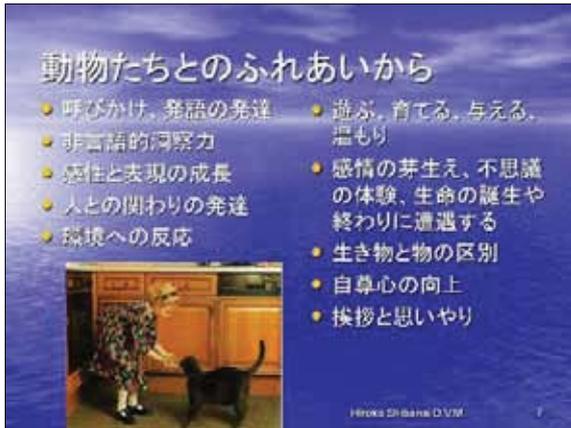


【スライド 5】

この画面には、豊かという言葉にクエスチョンをつけています。私たちは本当に豊かなんでしょうか。近代化が進み、都市化した中で、実は社会環境も、私たち家族関係も大きく変わってしまっています。そうしたことによって生まれてくる多くの問題があります。結果としては、正しい家族の構成がなく、一家団らんもなく育ち、そして判断力を失った、こうした人が多くなれば、社会は大変危険にさらされてしまいます。地球は人が支えているからです。情動の安定した人を育てるために今、自然や動物たちが大切なのです。【スライド 5】



【スライド 6】



【スライド7】

さて、動物とは動く物です。動く物には注目しますね。大昔からそうだと思います。安全な友人または危険な対象、そしてまた、食べる対象としても注目したに違いありません。しかし、その動物が愛らしければ、私たちに内存する優しさをごく自然に引き出してくれる名手です。次は公益社団法人日本動物病院福祉協会の動物医療を通じて社会に貢献する活動、人と動物とのふれあい活動です。CAPP活動をスタートしてから24年間に1万400回を無事に実践して来ました。素晴らしい動物たちの力をかりて、事故もアレルギーもなく今日を迎えています。人は動物がいると発言が多くなり、能動的になります。次は子どもと動物の願わしい姿です。

【スライド6】【スライド7】



【スライド8】

そして、先日来日された、グリーンチムニーズの最高責任者でおられるウォーレン先生が、動物たちは子供たちの立派なセラピストですと話されました。よい条件で触れ合えば、こんなに素晴らしい相手になります。

【スライド8】

お年寄りにとっても同様です。何年も施設に入られて、言葉もなく、食事も食べさせてもらっていた高齢者の方が、1頭の小型犬と、かわいらしい娘さんのボランティアの「さわってください」という言葉で、つい手が動き



【スライド9】

ました。初めての動いた手でしたが、写真が撮られていました。良く見ると、犬をさわってくださいと伝えたのに、お嬢さんの手を握っていました。とても重要な場面で、これが証拠写真でもあり、これが動機付けです。すばらしいことです。このお年寄りも、いつも来てくださる娘さんの、手を握ってみたいなど、ずっと思っていたのでしょね。でも、あるとき勇気を持って手が動いたわけですね。

この写真は貴重です。この場がなければ、ある訪問活動のある場面で終わってしまいます。東京のあそか園という施設です。この方のために、この中央におられる施設長さんと介護の方たちと相談して、あのよう手を握れたのだから、スプーンぐらい持てるでしょうと、スプーンを持ってご飯をいただく練習をしました。それから数年ではありますけど、この方はスプーンでご飯を食べることが出来たのですね。その間この方の生活は大きく変わりました。1頭の動物の働きかけで。【スライド9】



【スライド10】

人と動物の触れ合いから生まれる、さまざまな効果が科学的にも立証されてきました。動物と暮らす高齢者は、通院数が少ない、入院日数が短くなる、投薬量も少ないなど、世界的にさまざまな効果が発表されています。益々高齢者がふえてくる社会で、その人たちの健康を維持す

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

伴侶動物と暮らす高齢者

- 高齢者は未来の話題を
- 通院少なく、投薬少なく
- 入院日数の短縮、健康で在宅が長くなる
- 高齢者の健康を支える社会的経済負担の軽減に



Hiroko Shibana D.V.M. 11

【スライド 11】

アレルギー・花粉症は

- 4～7才時に2頭以上の犬と暮らした子供はアレルギーの発症が低い

— アメリカ デルタ協会 ローレンス・ノーベル



Hiroko Shibana D.V.M. 14

【スライド 14】

ドイツ・オーストラリア

- 犬や猫は、2割以上の医療費の削減に貢献

— Bruce Headley オーストラリア



Hiroko Shibana D.V.M. 12

【スライド 12】

伴侶動物と暮らすことで



- 0才児から犬や猫と暮らすことで、アレルギー性鼻炎や結膜炎の発症が低い
- 兄弟の多い子供、農場に育った子、発展途上国の子供たちも

— スウェーデン小児アレルギー専門医学会

Hiroko Shibana D.V.M. 15

【スライド 15】

米国65才以上の938人に調査

- 犬と暮らす人通院回数1,75回少なかった
- これを日本の高齢者人口で見ると1年間で、500万回少なくなる

— Judith Siegel 1990



Hiroko Shibana D.V.M. 13

【スライド 13】

けです。人と動物の共通の感染症に関わる正しい情報が伝えられていなかったわけです。不潔でよいということでは決してありませんが、人類は適度な生活をしてきたのに、急に不潔恐怖症のような生活の中に入ってしまったことによる、花粉症などの発症も大変多くなっていることがわかっています。0歳児から共に暮らすことで、アレルギー性の疾患が少なくなることも解明されてきました。【スライド 14】【スライド 15】

るための社会的、経済的負担の軽減に役立つということは、国家予算に関係するほど大事なことです。家族としての犬や猫は、2%以上の医療費の軽減に貢献することが発表されています。【スライド 11】【スライド 12】

【スライド 13】

また、昨年の秋だったでしょうか、NHKのスペシャルでも紹介されていました。しばらく以前までは妊婦さんがいれば、まず家族の中の動物を家族から出してしまいなさいと、ほとんどそう言われていました。大きな間違いなのです。それは、動物医療側からも正しい情報を人の医療に伝えていなかったことにも間違いがあったわ

エンドキシンに触れる

- オーストラリアのザルツブルグ大学の調査他
- モンゴルの子ども 農場に育つ子
- 牛舎に通う子 兄弟の多い子
- ペットと暮らす子

- アレルギー性のぜんそく、花粉症が少ない



Hiroko Shibana D.V.M. 16

【スライド 16】

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

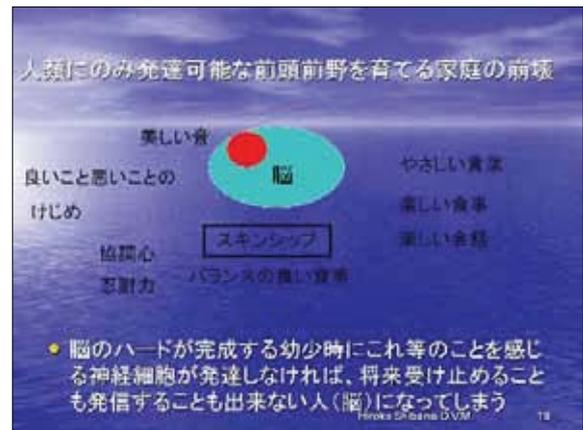
スライドもう1枚あるでしょうか。エンドトキシンに触れる。これは細菌のバクテリアが死滅したときの皮膚の一部ですね、エンドトキシンに0歳児から、ごく自然に触れることがとても大切であることが医学的にも裏づけられてきました。こうしたことがはっきりとこうした医療界から発表されていくことによって、やっと理解者が多くなりました。

モンゴルの子供たちは、馬ふんとか牛ふんを、草原や荒野から拾ってきて、それを炊いて、食事をつくる手伝いを子供のころからするわけです。その中でごく自然に受けるエンドトキシンはたくさんあるわけです。受け継いだ免疫、それと、新しく作り上げる免疫とのバランスが崩れることによって過剰な反応が出てしまうことを、私たちは正しく指導していく役割があると思います。

兄弟の多い子供、動物と一緒に暮らした子、農場で暮らす子ども、発展途上国の子どもにはアレルギー性の鼻炎や花粉症は少ないことが立証されています。自然が遠く、昨今、家族の中に動物たちがいることが、教育的なことだけでなく、医学的にもこんなに大きな役割を担っていることが分かります。

この場合ただ動物と暮らせば良いと言うものではありません。正しく健康管理がされた家族としての動物たちとの生活です。このような報告もあります。5人兄弟の一番上の子供は6.0%、5番目のお子さんは1.3%の確率でアレルギーの発症がみられるとのことでした。たしか「病の起源」という本がNHKから出版されていますので、御興味のある方は、ごらんになられると詳しくわかります。【スライド16】

チャイルドデベロップで脳と全身の発育について発表していますが、男の子、女の子ともに全身の体格の成長はゆるやかに20歳に向かって進み、各々の性の発育は10～12歳に向かって急激に発達しさらに脳のハードの発達は0歳時から10歳で一気に進むこと、体の免疫機能は12歳ころまでに確立するという事です。それまでにどのような環境で、どのようなものに感作されて育つかということが人の免疫機構の構築にどれだけ大切であるかということがわかります。この年齢までは、この免疫をつかさどる胸腺という組織が発達していますが、人も、犬や猫たちも、体ができ上がるころまでには、これは退縮してしまいます。その組織のある間、私は免疫塾と称していますが、免疫塾が開いている間にいろいろなものに触れて学び、免疫を高めておく必要があると、とても重要なことだと、こう思います。



【スライド17】

10歳までに脳のハードができます。もちろん学習もしますし、今は高齢者も、一度傷んだ脳も、正しい努力をすれば、ある程度の回復力のあることもわかっています。しかし、少なくとも、大切な時期に正しい発達がなければ、このように発達がおくれることもわかってきました。

私は、家庭の環境というのが子供たちにどんなに大切であるかということをつくづく思います。私たちは哺乳類です。哺乳類は母乳を飲み、その免疫を受け継ぎ、母親に抱かれた本当に心優しい時間をたくさん与えられることが、最も生涯の情動の安定に大切だということを多くの人に知らせ、最初の教育者はお母さん。その母親がしっかり抱き締めて、母乳をたっぷり飲ませて、情動を安定させて、褒めて抱き締めてほしい。動物たちも、今、陽性強化法で、褒めて、優しく抱き締めて育てるではありませんか。

私たちが小学校に訪問活動すると、その後で保護者の方々が、どうして、きょう来ているわんちゃんたちは、こんなにお利口なのですかと聞かれます。それは、小さなことでも褒めて、褒めて、優しく抱いて育てているのですよと申し上げると、お母さんたち、もっと早く聞いておけばよかったと、こうおっしゃいますね。本当に哺乳動物です、互いに。どんなにスキんシップが大切かということを伝えなければなりません。そして、家族の団らんやそうしたぬくもり、そのことを、この前頭前野、人類のみが持つおでこの発達するときにしっかりと身につけることができないと、大人になってから、温かい発想をすることができにくいこともわかりました。

そのような意味で、今、どの家庭でも兄弟が多いとか大家族で暮らすことが難しい場合、共に育つ動物たちが大切であることを多くの方に伝えていただきたいと思います。

さて、最近はアニマルセラピーという言葉が多様され

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

今なぜ身近な動物とのかかわりが大切なのでしょうか？

- 環境の変化
- 社会の変化
- 家族の変化



Hiroko Shibana D.V.M. 20

【スライド 18】

今 日本は



- 日本人の平均寿命 世界最長
- 日本人の出生率 世界最小
- 最も長寿なのに子供を生み育てる力を世界で最も失ってしまった
- 35,000人以上の自殺者

Hiroko Shibana D.V.M. 21

【スライド 21】

今注目される「アニマルセラピー」

動物介在活動 AAA 動物介在療法 AAT 動物介在教育 AAE



● この3つは明確に分けられている

Hiroko Shibana D.V.M. 21

【スライド 19】

日本における家庭内暴力の発生

- 2004年 14,410件
- 2005年 16,888件
 - 殺害に及んだ 78件
 - 暴力に及んだ 202件
 - 傷害に及んだ 887件



Hiroko Shibana D.V.M. 26

【スライド 22】

公益社団法人 日本動物病院福祉協会の CAPP活動で行われた AAE(主に小学校への訪問活動)



● 活動の大半が単発的であったが、近年その内容が重視され、継続的の中し出が多くなっている

Hiroko Shibana D.V.M. 22

【スライド 20】

幼児への加害者は



Hiroko Shibana D.V.M. 25

【スライド 23】

ています。これはメディアの造語で正しくはありません。一般的には動物に癒されると理解できます。しかし正しくは動物介在活動、介在療法、介在教育として各々に現場活動の内容によって明確に区別されます。2000年頃から、小学校の訪問活動は希望が多くなっています。健康で衛生的で幸せな家族として、飼い主が責任を持って育てた動物たちを伴って学校に訪問します。お子さんたちに正しい動物との触れ合い方を基本に様々なプログラムを先生方とプログラムし動物たちを悪者にしない、そして、温かい命を受け継いでくれるように、先生方の協力のもと、授業を行います。【スライド 17～20】

子供の声「騒音」の時代

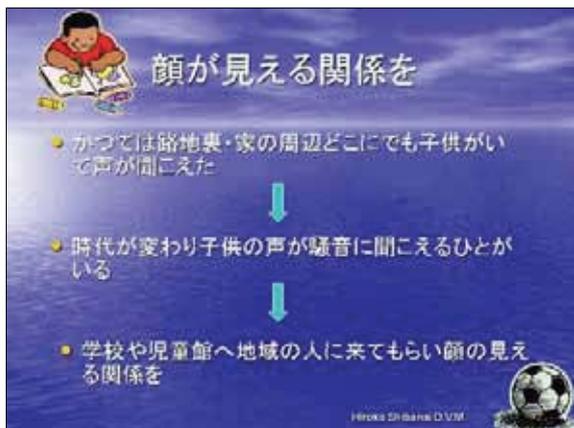


- 吹奏楽・合唱は窓を閉めて
- 野球部かけ声・打つ音も
- 放課後の児童館うるさい
- 公園で子供の遊ぶ声
- 運動会の練習の音
- 保育園・幼稚園で園児の遊ぶ声

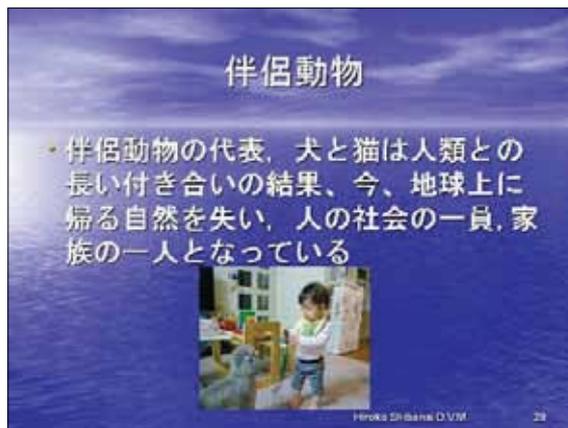
自治体への苦情増加

Hiroko Shibana D.V.M. 25

【スライド 24】



【スライド 25】

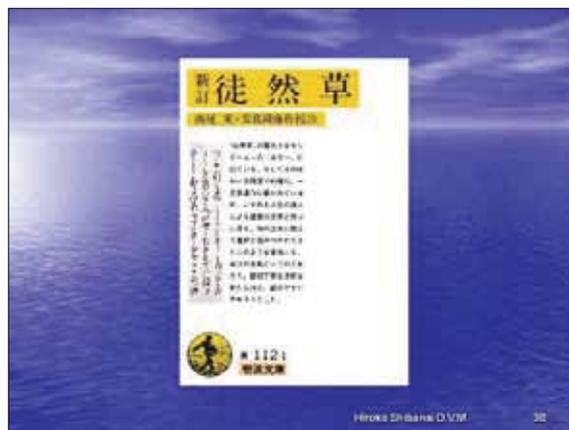


【スライド 27】

今、日本は長寿国です。そして、この長寿国でありながら、子供たちを育てる力を失いつつあるように思います。子供たちが減ってくると、就労人口はこれから20年後に大きく減ってしまい、国力に影響します。そして自殺大国でもあります。さまざまな問題があります。家庭内暴力も次第にふえて、傷害を受けた幼児に、加害は母親が圧倒的に多い、そして、次は父親であったり、毎日多くの事件が起こっています。きのうの事件ときょうの事件が、もうわからないような毎日です。こんなことはなぜ起こるのでしょうか。情動の安定した人を育てることが、出来にくくなっているからです。世界の平和を守るために心の安定した人造りが急務であると思います。

また、昨今は子供の声が騒音として、自治体に苦情が出るそうです。こんなこと考えられますか。子供たちの元気な声が宝物だと思えるような環境を、私たちが多くの人に知らせ続けなくてはなりません。子どもたちの顔の見える関係にしないと、騒音とわれてしまう。こんなことはあってはならないです。【スライド 21 ~ 25】

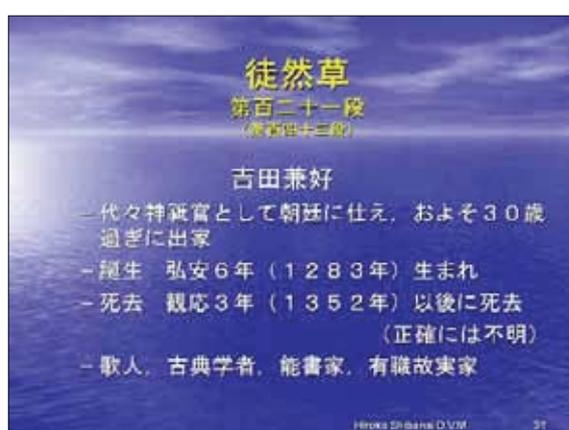
日本では、今、犬と猫の飼育頭数よりも、15歳以下の子供の方が800万人ぐらい少ないそうです。家族としての動物たちが各々に役割を担ってくれば、こちらを助けることができる。もちろん子どもたちだけではありません。病気の人に、孤独な人に、高齢者のためにも役立ちます。動物たちがそのように役に立つことがわかれば、これは必ず動物たちの社会的処遇もよくなります。それが、人類を支えてきてくれた動物たちへの私たちの正しい処遇ではないでしょうか。【スライド 26】【スライド 27】



【スライド 28】



【スライド 26】

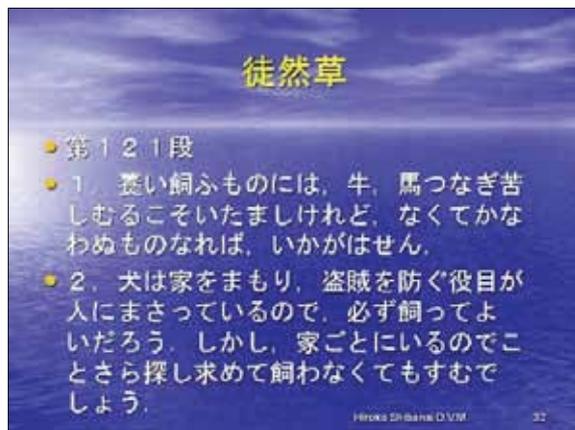


【スライド 29】

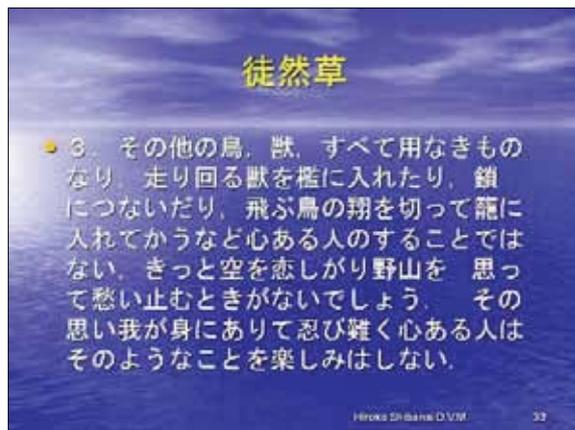
きょうはKnotsさんが迎えてくださった大会です。古い私が古いものを少し御披露して、記念にしたいと思います。「徒然草」多くの方々が、学生時代に学んでいます。つれづれなるままにという書き出しですが、兼好法師ですね。この文章、今はとても読みやすくなっている本が出ていますから、ぜひ一度お読みください。

【スライド 28】【スライド 29】

この兼好法師の各文章に、今日もそのまま通用する内容が沢山あります。徒然草の121段、養い飼うものには牛、馬、つなぎ苦しむこそ痛ましいけれど。大昔から牛や馬は田畑を耕し、重いものを引っ張ってくれた。いなくては困るからつないで、人間のそばに置いてきた。犬は家を守り、盗賊を防ぐ役目が人にまさっているの、ぜひ飼いましょう。探し求めなくても、たくさんいるから飼えますと言ってます。【スライド 30】

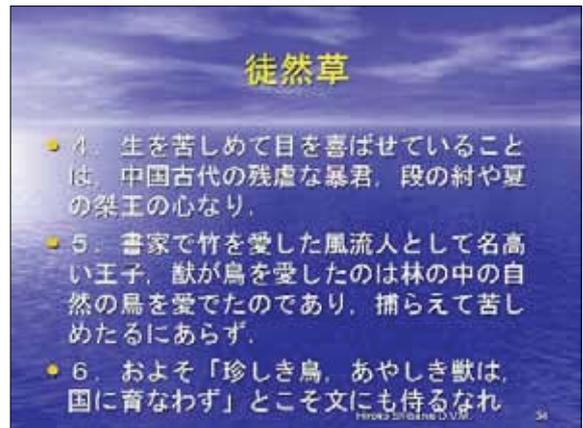


【スライド 30】



【スライド 31】

次です。その他の鳥やけもの、すべて用なきものなり。走り回るけものをおりに入れたり、鎖につないだり、飛ぶ鳥の羽を切って、かごに入れて飼うなどは、心ある人のやることではありません。きっと空を恋しがって、野山を走りたがって、思い悩むであろう。そんなことはしないようにしましょう。そんなことで楽しむようなことはやめましょう。そして、生きものを苦しめて自分の



【スライド 32】



【スライド 33】

目を喜ばせていることは、中国の暴君のやることです。(それは中国だけではなく) 書家で竹を愛した風流人はそうしたことはしないで、とらえて苦しめたりしたではありません。ごく自然の森の中、林の中にいる鳥や小鳥たちの声をめで楽しんだのですよ。

そして、また怪しい(珍しい)鳥、怪しきけものは国に合わず哀れと。これこそ、いわゆるエキゾチックペット、日本の国以外から、わざわざ変わった動物を輸入して、飼って不幸にし、天寿を全うさせることなどは決してできない。ペットにする外国生まれの動物の輸入は法律的に禁じるべきです。輸入中に半分以上が死亡し、また育てることができないではありませんか。兼好法師はこの時代に既にこのように述べている。今も私たちの願いのとおりではありませんか。

今、伴侶動物に携わる私たちは、人と動物の健康と福祉と教育を通じて温かい家庭、安全な社会、地球を支える心の安定した人、キレイな人、そして、真の勇氣を持った人を育てるために、いろいろな分野におられる方々の力を合わせて、健全な子供たちを育てて、安全な地球を守っていけるように、次の世代につないでいけるような働きを、1人ではできません。どうか多くの方たちの力

を合わせて、これからも進んでいきたいと思っておりますので、Knotsさん、これからも御努力いただけますようお願いしたいと思います。ありがとうございました。

【スライド 31 ~ 33】

- おことわり -

スライドの中の画面の一部に使わせていただいている写真は、インターズー社発行の「人と動物の関係学」からです。



○富永佳与子

柴内先生、ありがとうございました。

やはり動物にかかわっている方々が最後に考えるのは、我々人間も動物であるということ、その動物である人間はどうなっていくのだろうかということであると思います。そういう意味でも、大変示唆に富んだ御講演をありがとうございました。皆様、もう一度拍手をお願いします。

玉井公宏 Kimihiro TAMAI

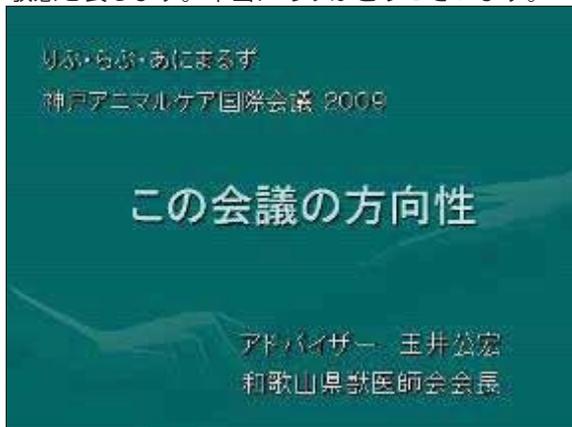
社団法人 和歌山県獣医師会会長

Chairperson, Veterinary Association of Wakayama Prefecture



皆さん、おはようございます。もう11時になりますと、「おはよう」じゃなくて、「こんにちは」というふうにも習ってはおりますが。ただいま御紹介いただきました、アドバイザーの玉井公宏でございます。

早朝より多数御参加くださいました皆様に感謝し、このような素晴らしい会議を企画、準備なされたNPO法人Knots様を初め、関係各位に敬意を表します。本当にありがとうございます。



【スライド1】

この会議の方向性について、私なりの意見を述べさせていただきます。それでは、スライドを進めていきます。



【スライド2】

今もちょっと触れましたが、「おはようございます」というあいさつがあります。皆様方も、けさ、お出かけ前、どなたかこういうあいさつを交わしてこられたことと思います。でも、実際はなかなか難しいんです、この「おはようございます」と声をかけるタイミング。子

供のときには、皆様方、こういうあいさつは普通に、素直にできたはずですが、でも、大きくなるに従って、何となく照れくさい、また、知らない人とはかかわらない、かかわりたくない、どうしてもそうなってしまいます。本当は、こういうあいさつをした方がよかったんだけど、後になって思うこともあります。【スライド2】



【スライド3】

家庭犬しつけインストラクターさんの実習や講義、しつけ教室などを受けにまいりますと、犬のお散歩のときには、出会った人に率先して、こちら側からごあいさつをしましょうと、こういう指導をされておられます。その結果、そういうしつけ教室、いろんな機会にそういうことを家庭犬しつけインストラクターさんたちが教えてくださったおかげで、最近では、犬を連れてくる人は礼儀正しいと、地域の評判になってくるようになりました。

【スライド3】

また、お散歩の途中の話ですけども、「もう少しこっちに寄ろうね」と、狭い道でのお散歩のときなどは、こう、皆さん寄っておられると思います。人に迷惑をかけるかもしれない、このまま行けば、犬がけがをするかもしれないし、だから犬って嫌って、だれかに言われたりするかもしれません。そんなことは、やっぱりよくないですね。それで、犬を連れてくる人は、だれかと狭いところで出会うと、自分の犬をこっちの方に引き寄せて、そういうトラブルを回避しようとする。そういったところを世間の人は、「犬を連れてくる人は気配りができるね」と、そういうふうになってくださっています。

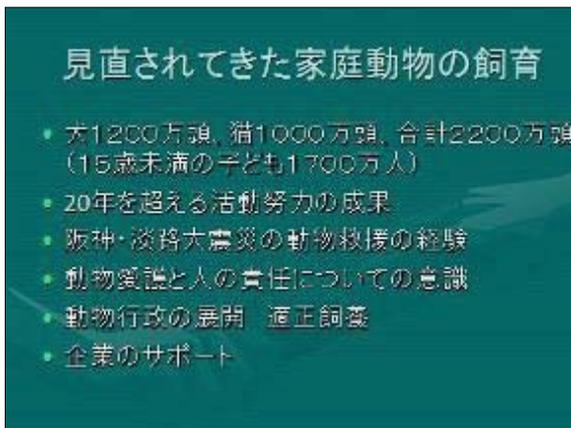
【スライド4】

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message



【スライド4】



【スライド5】

見直されてきた家庭動物の飼育ということですが、見直されてきているということは、以前はよくなかったということをお知らせしています。先ほど、柴内先生のお話の中にもありましたが、数字は若干違いますが、私の数字の方がちょっとアバウトだと思いますが、現在、日本には犬が1,200万頭、猫が1,000万頭、合計2,200万頭の動物が飼われていると言われています。柴内先生の御講演にもありましたように、一方、子供たちの数は1,700万人というふうに使われています。このように、子供よりも家庭動物の数の方が多いんです。もし、見直されてきていなければ、今ごろは大問題になっていたところでした。これらのことは、20年を超える皆様方の活動努力の成果です。大問題になっていないわけです。【スライド5】

先ほど、市田先生から御講演をいただきました阪神・淡路大震災の動物救援の経験も、大変貴重なものがあります。時間はかかりましたが、動物愛護と人の責任について、こういう意識が高まってまいりました。動物行政も適正使用という言葉が行政の中で使われ、充実してまいりました。こういった動物行政が適正使用に踏み込むという言葉も、20年前にはなかったと思っております。結果として、さまざまな企業が私たちの活動をサポート

してくれるようになってまいりました。当然、家庭動物に対する思い、これも高まってまいりました。

先ほど、柴内先生に御講演いただきましたヒューマン・アニマル・ボンド、こういう概念が柴内先生たちによって20数年前にアメリカからもたらされて以来、さまざまな効果の実証がなされました。先ほど、柴内先生がお示しされたとおりです。

飼育方法に関する知識、意識は向上いたしました。動物の健康に関する知識、意識も目覚ましく向上いたしました。獣医療に対する期待、要望の高まりも日ごと増しており、私は獣医師で動物病院を運営しておりますが、私ども現場における獣医師も、日ごろの診療に加えて、専門診療や高度獣医療にそういったシステムを整備して、これらの高い要望に対応してまいりました。【スライド6】



【スライド6】



【スライド7】

動物園に対する関心の高まりも、皆様御承知のとおりです。展示方法の工夫や環境エンリッチメント、こういう言葉をキーワードとしています。マスコミに取り上げられ、皆さん方が広くこういう動きを知ることになり、動物園はかつてないにぎわいを見せているということですが、非常にありがたいことです。【スライド7】

野生動物への取り組みも同様です。コウノトリが、放鳥された豊岡市から250キロメートル以上離れた和歌

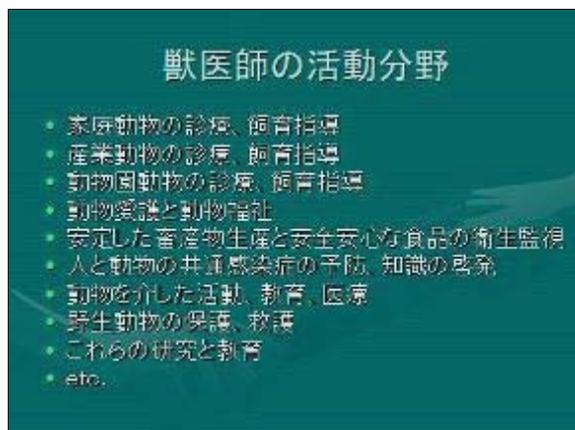
アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

山県南部の町に飛来したということが報じられました。地道な保護、研究、活動が、マスコミのおかげで多くの人々の関心事となりました。【スライド8】



【スライド8】



【スライド9】

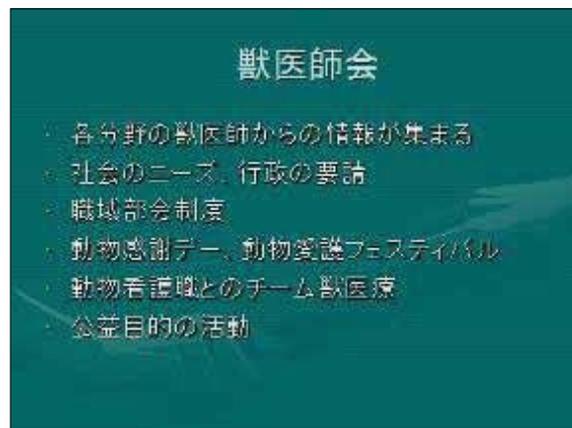
獣医師の活動分野は、次のように、ここに書かれてありますように大変幅広く、今まで述べたすべての活動にも、獣医師が密接に関与しています。

家庭動物の診療、これはいわゆる動物病院のことですが、こういったところで、診療だけではなく、正しい飼育方法であったり、いろんな人とのお付き合いの方法も含めて、そういう飼育の指導がなされています。産業動物の診療におきましても、生産性を追求するだけではなく、動物の福祉に配慮した飼い方、そういった指導がなされており、病気を鎮圧していくことは、彼ら獣医師と農家の非常に大事な仕事であります。

動物園で展示される動物も、必ずそこには獣医師が診療し、飼育員さんたちと一緒にエンリッチメント、こういったことを考えながら、環境をどんどん豊かにしていき、動物が幸せになるような工夫がなされています。

動物愛護、動物福祉、こういったことを、やはり獣医師は職業としてかわり、推進をしています。安定した畜産物の生産と安心・安全な食品の衛生監視につきましても、獣医師が携わっております。人と動物の共通感染

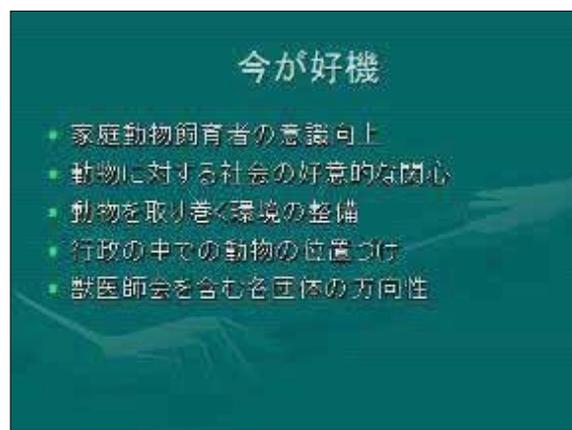
症の予防、知識の啓発、動物を介した活動や教育や医療、野生動物の保護や救護、これらの研究と教育、あらゆる面で獣医師が活躍しております。このほかにも、きっと幾つもの仕事があると思っております。【スライド9】



【スライド10】

獣医師会は、こういった幅広い業務や活動に当たる獣医師で構成される団体です。各分野の獣医師からの情報が集まり、社会のニーズ、行政の要請、こういったものに柔軟にこたえてまいっております。

職域部会制度によって、現在では分野ごとにきめ細かい活動をしています。動物感謝デーや動物愛護フェスティバルの、そういった広報啓発事業も決して欠かしてはおりません。動物看護職とのチーム獣医療も、組織化、制度化を推進しています。【スライド10】



【スライド11】

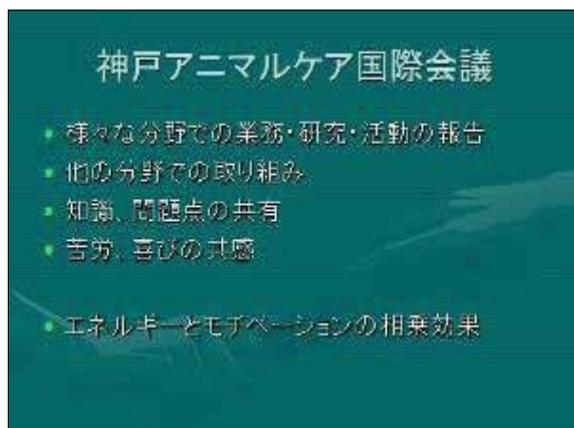
獣医師会は、公益目的の活動を主眼とする方向性を既に打ち出しております。今が好機と、すべての分野に関して言えると思っております。家庭動物飼育者の意識は向上し、動物に対する社会の好意的な関心は高まり、動物を取り巻く環境の整備が進み、行政の中での動物の位置づけも明確になってまいりました。獣医師会を含む各団体の方向性も、今までの成果をもとに、前向きな検討が加えられています。【スライド11】

この好機に、神戸アニマルケア国際会議が開催されま

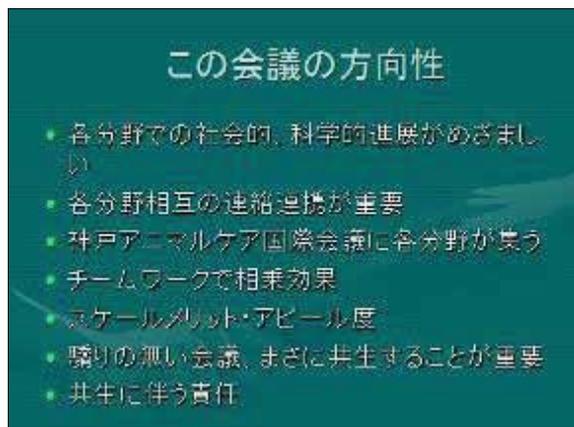
アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

した。さまざまな分野での業務、研究、活動の報告が、2日間にわたって発表されます。現場に即した意見の交換も活発になされるでしょう。他の分野での取り組みにも触れることができ、視野は大きく広がると思います。知識、問題点の共有がなされることは大変重要なことです。苦勞、喜びの共感が多くの参加者の人間性をよみがえらすことも可能でしょう。エネルギーとモチベーションの相乗効果は、この会議をさらに将来へと発展させていくことでしょう。【スライド12】



【スライド12】

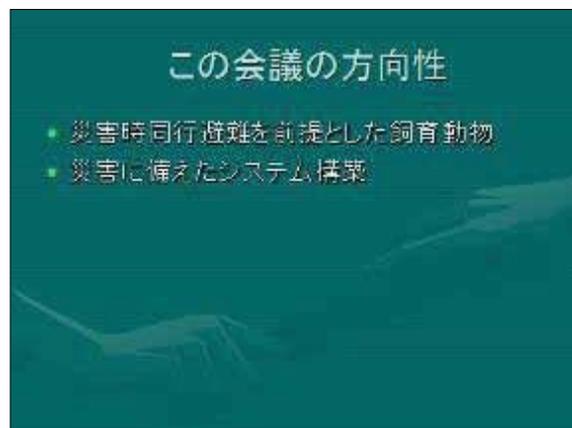


【スライド13】

この会議の方向性は、各分野での社会的、科学的進展が目覚ましい、そういったことが、方向性と言うところのベクトルの大きさとなります。このベクトルの大きさにつきましては、各分野の先生方が一生懸命、また、活動に携わる方々が真心を込めて推進している限り、このベクトルは大きくなり続けることは間違いがないと思っております。

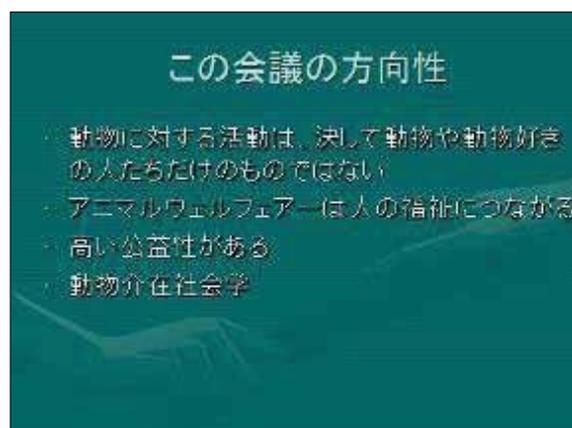
各分野相互の連絡、連携が重要であることは言うまでもありません。神戸アニマルケア国際会議に各分野が集うことが恒例となれば、すばらしいことだと思います。チームワークで相乗効果が出ることは間違いなく、スケールメリットによりアピール度は増し、会議の報告書やインターネット、マスコミ報道などで、加速度的に社

会に、人々の心に入り込んでいくことができます。だからこそ、ただし、おごりのない会議を心がけて、他の会議や組織、団体と、まさに共生することが重要だと思います。共生に伴う責任がそこに存在することも、皆様御承知のとおりです。【スライド13】



【スライド14】

災害時に同行避難、家庭飼育動物と一緒に連れて避難をする、こういったことは、先ほどの市田先生の御講演の中にありました神戸の体験、経験を踏まえ、その後、新潟県で発生いたしました中越地震、そういったところで実践されたということではありますが、また、都市部と山間部、そういったところでの違いもあるでしょうけども、私たちは、災害時に同行避難を前提とした飼育動物、あるいは動物の飼育について、協議、検討、実践を優先させていく必要があると考えています。災害に備えたシステム構築も喫緊の課題です。【スライド14】

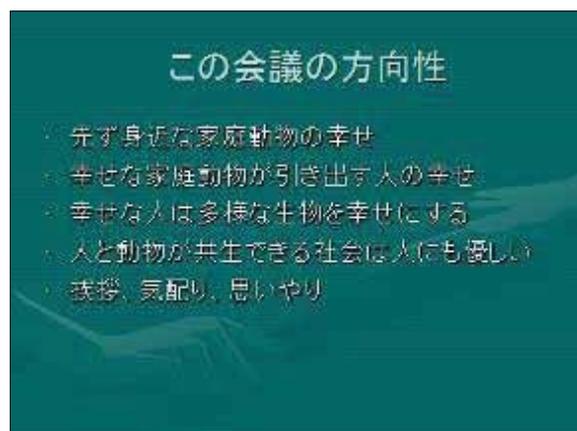


【スライド15】

動物に対する活動は、決して動物好きの人たちのためだけのものではない。また、アニマルウェルフェアは人の福祉につながる、そういったことを私たちは、エビデンスに裏づけられた説得力のあるものにしていかなければなりません。高い公益性があるという共通理念も明確にしていきましょう。動物介在社会学とでも言うべき切り口で、世の中を明るくしていく方法を見出していくこ

ともおもしろいことだと思います。【スライド15】

まず、身近な家庭動物の幸せを目指す、具体的な方法を一層発信していきましょう。幸せな家庭動物が引き出す人の幸せを示し、幸せな人が多様な動物をさらに幸せにするという、そういった希望を社会に明示していく必要があります。人と動物が共生できる社会は人にも優しいのですから、あいさつ、気配り、思いやりに満ちた動物介在社会学の発展にこの会議が寄与できれば、とてもすばらしいことだと思います。【スライド16】



【スライド16】



【スライド17】

御清聴ありがとうございました。

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

山口千津子 Chizuko YAMAGUCHI

社団法人 日本動物福祉協会 獣医師調査員

Veterinary Inspector, Japan Animal Welfare Society



皆様、こんにちは。今、御紹介いただきました、アドバイザーの1人として、この国際会議をお手伝いさせていただいております山口と申します。よろしくお祈りいたします。

震災で被災した多くの動物たちを救う、兵庫県南部地震動物救援本部に、私どもの協会、日本動物福祉協会の阪神支部がその一構成員として参画いたしました。私は常には東京の方にありますので、東京の方で後方支援ということで、救援物資の寄附、募金、それから、ボランティアを東京の方から派遣するというふうなことをしながら、時々には自分でも現場でいろいろお手伝いをさせていただいております。

実際、同じ関西にある、私の実家でも震災のときは、やはり揺れました。朝の5時40分ぐらいですかね。その少し前に、うちではその当時猫が3匹いたんですが、すごく、にゃおにゃお騒ぐものですから、私の母たちがどうしたのと言って起き出してきた。そのときにぐらっと揺れたということで、その話を母から電話があったのを覚えております。

ありがたいことに私の実家の方は、かわらぐれたことと、壁に少々亀裂が入ったことぐらいで済んだんですけども、こちらの震源地の神戸では、本当に6,500人以上の方が亡くなられて、着のみ着のまま逃げられた。ただ、皆さん、やはり家族ですから、その着のみ着のままの中でも犬や猫を同伴して、避難所に連れてこられたんですね。また、自分と犬だけが、建物が倒れたその柱のすき間で生き残って、この子がいたからこそ、今まで生きてこられたというお話を聞きまして、本当に緊急災害時に動物を助けることは、人を助けることだというふうに思いを強くいたしました。

この日本で初めて官民協働して緊急災害時に動物を救うという活動が神戸で始まったわけですが、この神戸の地で、人とすべての動物の幸せを考える神戸アニマルケア国際会議が開催されることは、とても意義深く、また、ふさわしいというふうに思いました。

私たち、今までいろんな形で動物を利用してきております。私たちが血にし、肉にするために、その命をいただく家畜も、それから、皆さんが子供のころから訪れて

おられる動物園で展示される動物も、それから、人の機能を補うために、その人の補助をする補助犬。学校で飼育されている動物たち。先ほど柴内先生のお写真にもありましたように、高齢者施設を訪問する動物たち。私たちの薬を開発するために、実験に使われる動物たち。また、私たちがともに暮らしているペット動物も、その中に入るかもしれません。そういうふうには人の飼育下にある動物は、自分の意思のとおり何でもやりたいことをできるわけではありません。行きたいときに行き、行きたいところへ出かけて行って、食べたいものを食べるというわけにはいかないんですね。その生活も、環境も、人によってすべてコントロールされております。私たちはコントロールされているからこそ、その動物たちの福祉が確保されるように配慮しなければならない道義的義務を負っていると思うんですね。

じゃあ、人の飼育下でない動物はどうか。全然、人が手を染めていない野生動物であっても、昨今の温暖化等、ほとんどが人間の影響を受けています。そして、どんどん開発をして、彼らの生息環境をどんどん破壊して、小さく小さくして絶滅に追い込んでいくわけですから、私たちは彼らに対しても責任があると思います。

この神戸アニマルケア会議では、各ワークショップ、犬や猫のようにペット動物だけではなく、畜産動物についても、動物園で飼われている動物についても、学校を訪問する動物についても、学校で飼われている動物についても、それから、たくさんの、いろんなすべての、野生でいて、かつ、人と軋轢でもっているいろいろな問題として取り上げられている動物についても、幅広い、ひいて言えば、私たちがかわるすべての動物について、ここでは各ワークショップで話し合われるということになっております。

私は、この各ワークショップでは、世界的な動物福祉の基本であります五つの自由、Five Freedomsですね。この五つの自由に基づいたアニマルケアに立って、人と動物のよりよい関係を目指した討議がなされるものと期待しています。

その五つの自由というのは何でしょうかと言いますと、まず一つ目が、飢えと渇きからの自由ですね。これは、その動物種にふさわしい、あるいはその動物の状態にふさわしい食べ物を与えなさい。渇きからの自由。新

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

鮮なお水がいつでも飲めるようにしなさい。ただし、獣医学的に規制がかかる場合は、これは別です。

それから2番目、不快からの自由。これは、その動物に適した快適な環境を与えなさいということなんです。

3番目、痛み、病気、けがからの自由ということで、動物も私たちも同じですが、病気もします、けがもしますけれども、そういうことのないように、できるだけ予防しなさいと。でも、万が一病気になったり、けがをしたりしたら、その時点での最良の獣医療を与えなさいということですね。

4番目、恐怖と抑圧からの自由ということで、動物も私たちと同じように、心も感情もあります。痛みというふうに直接肉体的に受けるものではなく、精神的に受けるものも、動物にとって恐怖、多大なストレスになるんですね。多分犬を飼ってらしたらおわかりだと思いますけれども、雷が鳴れば、犬はぶるぶる震えています。これを見れば、ああ、犬も雷が怖いんだというのがおわかりになると思います。このように恐怖も感じます。多大なストレスがかかれば、動物はそのまんま体に異常をあらわしてくることもあります。人間もそうですけど、精神的なストレスが続けば、胃に穴があくみたいなことをよく言いますが、あるいは円形はげができるみたいなことも言いますが、これは同じように、動物も体に同じような異常を来します。

実際、私、学生のときに、附属の動物病院に、やはり精神的に多大なストレスがかかって、自虐を起こしている動物が連れてこられたのを見ております。犬がずっと自分の腕をかみ続けているという状態があったんですね。

昨今は小型犬が、私は命にブームはないと思ってますからブームという言葉は使いたくはないんですけども、一応マスコミ的に言いますとブームということで、小型犬がはやっております。そうすると、皆さん、ああ、小型犬だから、マンションの中で自由にしとけば、これで大丈夫というふうに思われて、最初は散歩に朝晩2回行ってましたが、仕事が忙しくなって行けなくなった。でも、マンションの中で自由にしてるから大丈夫よねということでありましたら、そのうちに皮膚が赤くはれてきて、かゆい、かゆいと、いつもかくようになりました。そして、獣医さんのところへ連れていきますと、何を調べても原因が出てこない。そこで、その獣医さんは行動学のことを勉強されてましたから、ひょっとしてどんな生活をされてますかということで、動物との暮らしぶり

を聞かれました。そうしますと、最初は散歩に連れていっておりましたが、だんだん忙しくなって、お散歩は1週間に1回行けたらいいぐらいになりましたと告げられたのです。ところが、その犬はジャックラッセルテリアという小型犬ですが、筋肉の塊、運動がたくさん要る動物でした。外へ出て走り回れない、ストレスがたまって、皮膚に影響を与えてきたのです。そこで動物との暮らし方を改善して、お散歩に行くようになり、どんどん、その皮膚の赤みが薄れてきて、かゆみもとまってきたということで、精神的なものはたまりにたまりますと、ひいては肉体的に病状をあらわしてきます。ですから、この恐怖と抑圧からの自由というのは、とても大切なことなんです。

5番目、最後の五つ目は、本来の行動パターンが発揮できる自由。その動物にとって正常な行動を発揮できるようにということで、最近では、これがとても重要視されております。先ほどもエンリッチメントという言葉が先生のお話の中に出てまいりましたが、動物園動物でもエンリッチメントを考えようという動きは出てまいりました。ただ、そのエンリッチメントの方法については、よくよく考えないと、動物に悪影響を与えるということもあると思います。その1頭の動物がエンリッチメントされても、その周りにいる動物が、逆にそれによって恐怖を抱くみたいなことです。この正常な行動を発揮できるような環境を与得ることに関しては、中の動物との共生を考える連絡会が主催いたしますこの国際会議でワークショップⅢで、畜産動物の福祉を取り上げます。この畜産動物の福祉については、ようやく日本でもガイドラインをどうしようかというところまでできました。

EUの方では、既に、そのことについて飼育管理、輸送、屠殺の方法等すべて含めて、EUの指令等で適切な方法を示されております。日本はかなりおくれて、やっとやっと緒についたばかりです。この畜産動物につきましても、私たちがいただいてあります卵、お肉、ハム、牛乳、本当に私たちの生活に密着しております。ですから、消費者であります私たちが関心を持たなければなりません。そして、これが昨今ちょっと、中国からの輸入食品で問題になりました食の安全にそのまんまつながる。健康な動物からのものをいただくということは人間の健康にもつながるということで、とても大切な分野になってきております。

今、これをお話ししました5つの自由というのは、もともと畜産動物が余りにもひどい扱いを受けている、飼育管理が劣悪だということで、畜産動物の飼育管理を改

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

善しようということで提唱されたものなんですね。今では、この5つの自由が、畜産動物だけではなく動物園動物についても、私たちの医薬品等で使われる実験動物についても、その飼育管理については、やはり、これが当てはまるのではないかと。

私たちがともに暮らしているペット動物についても、かわいがるといふのと、福祉が行き渡っているのでは全く別問題なんですね。かわいい、かわいい、うちはかわいがってます。だから、私の食べるものを皆与えてますというふうなことであれば、かわいがってるつもりが、逆にその動物の病気を誘発しているということになります。

ですから、私たちはこの5つの自由をしっかりと頭に置いて、すべての動物に対して、この5つの自由に基づいたアニマルケアの上に立って、人と動物のよりよい関係を目指したいというふうに思っております。

この動物の福祉というのは、感情の問題ではないんですね。動物の福祉は科学であるというふうに、これはもう世界的に認められております。そして、私は一応獣医の免許は持っております。開業はしておりませんし、臨床からはかなり離れておりますけれども、獣医師は科学に基づいた福祉を推進する役目を負っていると思うんですね。そして、獣医師とともに動物に携わる動物看護師の方々も、この科学に基づいた福祉を推進する役目を負っていると思います。

来年の獣医師の国家試験から、いろんな、獣医師の問題があったものですから、獣医倫理と動物福祉というのが国家試験の項目の一つに入りました。今まで、獣医大学で、動物の福祉を単発的に教えている学校はありましたけれども、カリキュラムとして入れられているというところはなかなか、そんなにはなかったんですね。ところが、この国家試験に入るということになって、慌てて、あちらこちらの大学が、その動物の福祉の講義を取り入れようという方向になってきております。

この動物福祉は科学であるということで、それぞれの国の政府は、この動物福祉の部門を受け持つ部局を立ち上げておりますし、日本でも、日本の場合は、畜産動物は農水省ですし、私たちがふだん、ともに暮らしている犬や猫等の動物については環境省ですし、ちょっと省庁が分かれてはおりますけれども、日本でも、動物の福祉を担う部局はあるわけですね。それがどこまでしっかり役割を果たしているかどうかはまた別問題として、一応、その部局があるということですね。

最近では、そういうふうに国でも動きが出てまいりまし

たが、一般の方々の動物への関心も高くなりました。ただ、最近少し懸念する傾向が出てきているなと思います。新聞や雑誌、テレビで、いろんな動物に関することが取り上げられ、その機会がふえているんですが、中には、それらの情報が必ずしも正確でなかったり、感情的にとらえられていたり、あるいは、こんなかわいい子ですとか、人気犬種上位10位はこれですとか、そういうかわいさを強調したり、あるいはファッショングッズのような取り上げられ方をしたり、あるいはお涙ちょうだいのストーリーで、こんなにかわいそうなんですということだけ強調されて報道されたりということで、このまま続けば、人と動物の関係を誤った方向に導きかねない状況が見られるんですね。

ですから、私が、この神戸アニマルケア国際会議に期待し、私が思っております方向性というのは、感情に走るのではなく、正確な情報を広く発信することによって、人とすべての動物、人の飼育下にあるすべての動物、及び、人の飼育下にはないけれども、人間活動が多大な影響を及ぼしている野生動物についても、人と動物のよりよい関係を築いて、人と動物がともに幸せに暮らせる社会、地球を目指す一助になることであり、そのように願っております。

1回ではなく、物事は継続すること。最初は小さな1歩かもしれませんが、継続をしていくことによって、どんどん積み重ねることによって動きは大きくなり、国民すべての方々の意識に浸透していくものだというふうに思っております。ですから、本当にこの第1回の国際会議のために、今まで、きょうまで準備をされてこられたKnotsさんに、まずはお疲れさまでしたと言わせていただきたいんですが、これが始まりですよ。さらに2年に1回継続していくことで、日本の社会を変えていけたらな。ひいてはアジアを、ひいては地球上のすべての人と動物の関係をよりよいものにしていけたらなというふうに願って、私のお話は終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

○富永佳与子

山口先生、ありがとうございました。まさに私たちの目指す目標を話していただきまして、本当にありがとうございました。

それでは、最後を飾りましてと言わせていただいて、よろしいのでしょうか。山崎恵子先生にお願いしたいと思います。山崎先生、よろしく願いいたします。

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

山崎恵子 Keiko YAMAZAKI

ペット研究会「互」主宰

Companion Animal Study Group "Go"



最後を飾れるかどうかわかりませんが、とりあえず、どんじりでお話をさせていただきます。

まず、皆様、神戸アニマルケア 2009 年にようこそおいでくださいました。本当にありがとうございます。それから、本当に今まで頑張ってくれた、

先生方すべておっしゃっていただきましたけれど、Knotsの富永さん、特に勝田さん、リーダーシップをとられて、今までとても大変だったと思います。

私は、アドバイザーというのは名前だけでございまして、おまけに2週間前にコンピューターがクラッシュしてしまいまして、全くの劣等生で、本当にいろいろお手伝いすべきことができなかつたことを、公の場をかりておわび申し上げます。

今回の国際会議に関しましては、やはりテーマは動物の福祉だと思えます。先ほど柴内先生もおっしゃっておられましたが、動物と人間というのは、人間も動物ですから切り離すことはできません。動物は人間にとって何かといえば、環境のバロメーターです。原始人から現在に至るまで、私たちは、例えば小鳥がさえずるのを聞いて、何となくいい気持ちになっていました。これはなぜかということ、小鳥がさえずるだけの環境があるからです。肉食獣はいない、つまり敵がいな。それから、例えば、お天気が崩れる心配は今のところないなど。この環境はオーケーですという、そういう合図が出されているために、私たちは何となくいい気分になる。実は、これが動物によるいやしの正体です。小鳥がわさわさ騒いでいたり、血を流して、ばたばたして苦しんでいたら、いい気持ちになりません。人間、ストレスかかります。つまり、動物がかわいいからとか、無償の愛を提供してくれるから、いやされるのではないのです。動物が幸せだから、私たちはいやされるのです。

そう考えますと、Happy animals Happy people、つまり、動物が幸せであれば、それを見た人間は幸せになれるけれど、動物が不幸であれば、私たちは決してハッピーを手に入れることはできない。これが、やはり私たちと動物の関係のもと、本当の源、原点だと思えます。それを押さえれば、学校動物、それから展示動物、ペット、野生動物、もろもろの問題というのは全部明確になっ

てくると思えます。

先ほど、震災のお話を大変興味深く聞かせていただきました。私は、神戸のときは、もう単純に物集めの後方支援だけさせていただいておりましたけれど、東京の方の三宅島の震災の際には、最後に残りましたもらい手のつかない老犬、ずっと10年間外飼いをされていましてマルチーズ、すごいワイルドな子だったのですが、11歳でだれももらってくれないということで、福祉協会の山口千津子先生に御丁寧にお届けいただきましたものですから、飼わせていただきました。

災害と言えば、例えば神戸の後でも、新潟で何度か水害とか、地震もございました。新潟の事例ですけれど、動物を連れて避難してきたけれど、救護所に入れなかった人がいました。犬はだめですと言われたので、車で犬と一緒に寝泊まりをしたおかげで、例のエコノミー症候群とやらで心停止、つまりお亡くなりになってしまいました。それから、アメリカのたび重なるハリケーンなどでも、自分のペットを連れていかれるか、いかれないかという不安から逃げおくれる人、特に独居老人なども結構いらっちゃったという話を聞いております。

つまり、同行避難とか、動物を救えというのは、これは動物がかわいいから、かわいそうだから、大事だからという言葉だけでは片づけられないのです。動物を救わないと、そこにくっついてる人間が救えないのです。それだけ強いきずなを断ち切ることができないのです。だから、動物と人間は一つのパッケージとして見なければいけないという社会情勢がある。そういう意味において、私たちは動物に対して目を向ける必要がある。これは好き嫌いに関係ないのです。まさに、玉井先生がおっしゃった社会学ですね。ソーシャルワークの中に、動物という姿を私たちは入れなければいけない時代が来たということであると思えます。

動物が好きな方々であるからこそ、恐らくこういった会議にお顔を出されておられると思えますが、動物が好きである方々は、この国際会議を再確認の場としていただきたいと思います。好きという気持ちで、例えば、犬や猫の処分問題などに目を向けてくださる方はたくさんおられます。でも、そのほかの問題に目を向けてくださる方が、まだまだとても少ないことに、私ども、非常に心を痛めております。

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

例えば動物園動物、先ほどから動物園の話も何度か出ておりますけれど、例えば、おりの中のクマさんが行ったり来たりしている姿は何か、皆さん御存じですか。あれは常同行動と言って、人間の精神科の先生でも御存じの、精神的なバランスを崩したおかげで出る、病的な行動です。それを私たちは見て、喜んでいませんか。動物好きな人だったら、それ見て喜んじゃいけないんです。ここの会場には、動植の若い学生さんもたくさんおられます。動物が好きで恐らく勉強なさっていると思いますので、ぜひ、目の前の犬や猫以遠に周辺視野を広げて、動物全般が、みんながどういう境遇にあるかということに御関心を持っていただきたいと思います。そういう意味で、この国際会議が継続してやっていただけるということなので、あらゆる分野の動物の境遇に関するお話を本当に聞くことができる、すばらしい場所になっていくということを期待しております。



先ほど、山口千津子先生が、Five Freedoms、五つの自由のお話をなさいました。これは、あらゆる動物に当てはまるということもおっしゃいました。まさに、そのとおりです。そして、それに加えて、昨今は動物の福祉を測定しようという努力が、いろいろな分野で広がっております。私が尊敬いたします、ZOO CHECK CANADAのロバート・レイドローさんは、最近、五つのSという概念で動物福祉の測定をやっておられます。

それは、Space。どれだけ適切な空間を与えられているか。

Substrate。これは床です。私たち人間もそうですが、足は生き物の命です。人間は靴を脱いだり、畳を踏んだり、芝生を踏んだり、いろいろなところを歩くので、余り気がつかないかもしれませんが、家畜や動物園動物は、生活の9割以上をコンクリートの上で過ごすのです。これ人間であったら、確実にひざ、腰などをやられてしまいます。でも、皆さんあまり、それを考えたことはないでしょう。床面、ぜひ今度、動物園や農場に行ったとき

に、動物がどういう床を毎日踏んでいるか見てください。

それから、Social environment。これは社会的な環境づくり。エンリッチメントとは違います。単独行動のものは単独で、集団形成のものは集団で、そのような社会的な環境を整えましょうということです。

それから、環境エンリッチメントのStimulusですね。適切な刺激を与える。その刺激は適切でなければいけないと山口先生がおっしゃいました。適切でない刺激は常同行動につながります。私は、今までいろいろな動物園を見てまいりましたけれど、残念なことに、捕食するものと捕食されるものが隣り合わせで展示されてるといような状況に遭遇したことが何度もあります。どちらもストレス行動が出ています。自然の中ではあり得ないことです。食われるやつは食われないところに逃げようとするし、食うやつは、食われるやつが目の前にいて、とれないというのはどうしようもないストレスです。そういった状況が、でも、動物園の中で展開されています。それはエンリッチメントではありません。

それから、最後にShelter。Shelterは、これは犬猫のシェルターとは違って、おうちのことです。適切に雨風をしのぎ、そして、適切に隠れる場所が提供されているかどうか。動物園動物は複数で展示されていたら、お互いから隠れるプライベートなスペースそれから、人間の目に触れないプライベートなスペースを必要としています。犬猫にしてみれば、例えば犬は、子供などが騒いでいるときに避難できるクレートは必要です。猫なども、上の方に上って、世間からちょっと離れるスペースが必要です。そういったShelterが、あらゆる動物に提供されているかどうか。

この五つのSは、五つのFreedomに加えて、ぜひ皆様も、頭の中に入れて、身近な動物の幸せの尺度としてお使いいただきたいと思います。

もう一つ、先ほど、柴内先生が徒然草のお話をなさっておられました。本当に昔の方々というのは、実は動物のことをよく考えて、いろいろと自然をめでながら、その大切さというものを上手に説いておられたと思います。私は実は戦後の人間なのですが、私もちょっと古いお話をさせていただきます。皆様がよく御存じの犬公方、綱吉さんの話です。生類憐れみの令というのは、これは犬は大事にしなきゃいけないという犬公方さんがつくったおふれとして、天下の悪法と言われていることもありますし、日本で初めての動物愛護法だと言っておる方もおられます。皆さん、教科書で綱吉さんに関して、それ以外のことを学ばれましたか。綱吉さんというのは、本

アドバイザーメッセージ

Advisor's Message

当は究極の福祉国家を目指した、とても偉い人なのです。生類憐れみの令だけではないのです。彼は捨て子対策もやりました。牢屋改革もやったのです。囚人とて冬場は寒かろう、もう1枚着物を支給しなさい。囚人とて体が汚れるのは嫌であろう、何日かに一度は入浴をさせてやりなさい。人間にも優しい。動物にも優しい。先ほど言った、Happy animals、happy people ということを実践した日本の長だと思えます。それを、なぜ我々日本人が知らないのでしょうか。残念なことに、私は、これを英語の文献で見つけたのです。日本語でお読みになりたい方は、東大の塚本先生という方が、綱吉研究でこういったことをずっと本で書いておられます。教科書に載らないのは、依然として、日本の社会は動物なんかにかまけてるやつ、特に犬猫にかまけているやつは女々しいんだという考え方があるからです。綱吉さんの時代も、そういったことをやる綱吉は女々しいと陰口をたたかれていました。その当時のベストセラーは、かの有名な「葉隠」です。「葉隠」の中には立派な武士を育てる大名が、自分の5歳の息子に名刀を持たせ、犬を一刀両断させたという、話が載っています。それが我々の社会の本流の流れだとは決して思いたくありませんが、そういった流れを変えるということも非常に大事なことだと思います。

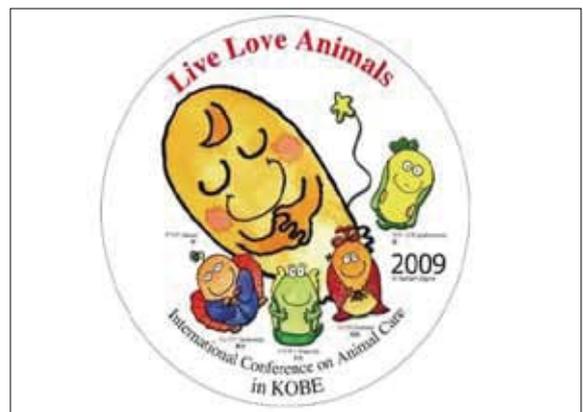
最後になりましたが、動物園の話に戻って、最近、ロバート・レイドローが日本に来て、私に言ったことを皆さんにお伝えしたいと思います。「僕は、名前は言いませんが、神奈川県のある動物園を見に行ったときに、そこにいる象の50歳のお誕生会をやっていたんだ。地元幼稚園児が野菜とか果物をいっぱい持って、象さんにプレゼント。例のくす玉割りとかもやっていたんだ。アジアゾウだったよ。君、知ってるかい。アジアゾウってね、親子、特に女系の群れで、お母さん、おばあさん、娘と3代ぐらい、10何頭の群れで水遊びしたり、森を移動したりするんだよ。僕はあのお誕生会を見て、50年間、この象はコンクリートの上で、1人で何を思って暮らしてきたのかな。そう思ったら、心が痛くなった。」

皆さんもぜひ考えてみてください。そして、皆様がここに来てくださったことは、動物にかわりまして、その関心に対して、私から改めて感謝をしたいと思えます。Mahalo. ありがとうございます。

○富永佳与子

ありがとうございました。Mahalo and Aloha. 山崎恵子先生、いつもながら、ありがとうございます。そして、皆様方に、あるべき姿というのを示してくださったのではないのでしょうか。

この会議につきましては、アドバイザーの先生の皆様が語り尽くしていただけたと思います。これこそが、まさに私の今回のねらいでございました。日本を代表される先生方の直接のお考えをお聞きし、そして、皆様とともに、これから先の日本のアニマルケアといったものを考えていきたい。そして、その先には必ず、人間はそれではどうなのか、人間はどうなっていくのかということに、やはり皆さん多大な関心を、動物関係にかかわっていらっしゃる方はお持ちだと思います。それをきちんとフィードバックしていけるような、そんな会議にしていけたらと、私は考えております。



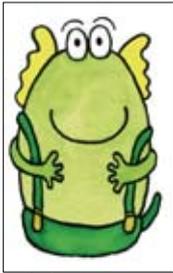
あのキャラクターたちをごらんください。彼らは、先ほど神戸については植村先生が御説明いただきましたので、そして、残りの3匹なんですけれども、Mahalo、



感謝 Appreciation
マハロ

これは感謝という意味です。これは、「Thank you」ではなく、「appreciation」という英語を使っています。それは、お互いの存在に感謝をしたい。まずはそれを感謝したい。そこに命があることに感謝をしたい。そして、我々に必ず平等に訪れるものというのは死です。どんな生き物でも、必ず死を迎えます。

でも、ただ死を迎える、それはあるんですけども、ただ、その瞬間までは幸せでありたい。幸せであることが、やはり重要である。そして、その幸せというのは、それぞれの動物たちにとってどんなものなのか。それを考えていく。それが本来の福祉のあり方ではないかと思えます。



幸せ Happiness
ハウオリ

そして、私どもは、そのお互いの存在に感謝をして、そして、少なくとも命を、そのときまで幸せであること。そして、そのことにきちんと責任を持っていこう。これが命に対する責任という意味で、私たちがこのキャラクターを設定したものでございます。



責任 Responsibility
クレアナ

すみません、私、実はインフルエンザに2週間ほど前にかかりまして、新型で免疫ができて、本当に免疫が12歳、14歳の子供と同じようにアップしておりますけれども、声の方がなかなかつらいところで、まだ戻っておりませんで、お聞き苦しい点がございましたら

お許しくさいます。それで、私ののどもだんだんとつらくなってまいりましたので、これをもちまして、りぶ・らぶ・あにまるず、神戸アニマルケア国際会議2009、基調講演の部を終わらせていただきたいと思ひます。皆様、御清聴ありがとうございました。

引き続きまして、会議事務局よりお知らせをいたします。

午後1時から、各部屋に分かれてワークショップを開催いたします。ここ、メインホールでは、ワークショップI、緊急災害時の危機管理ということで、先ほどからの救援本部からの続きのお話をさせていただきたいと思ひます。501号室では、先ほどからお話がありましたように、ワークショップIIとして、動物園におけるエンリッチメントの実際。そして、502号室では、先ほど山口先生からも御紹介がありました、ワークショップIII、産業動物の福祉と経営が行われます。

また、お昼になりましたので、御昼食につきましては、今回、併設の展示会を開催いたしています。そちらでは、有効活用のシカ肉ですとか、動物福祉に配慮しました飼育方法によるお肉などをお召し上がりになっていただくことができます。また、カフェもございしますので、また、ぜひ、御利用いただきたいと思ひます。

それでは、これから2日間、会議と展示会を皆様と一緒に楽しんでまいりたいと思ひます。皆様、本日はどうもありがとうございます。